

竹中正夫の C.B. デフォレスト研究を顧みて

竹 中 百 合 子

亡夫竹中正夫が『C.B. デフォレストの生涯—美と愛の探求』を出版したのは2003年。すでに20年の月日が経過した。このたびデフォレスト先生の召天50周年を記念し、学院主催による「C.B. デフォレスト展—愛と美を求めて—」が開催され、デフォレスト名誉院長の生涯にわたる尊いお働きが学内外に広く開示されたことは、学院の伝統を深く理解する上で大変有意義なことであったと思う。その展示会の方向付けとして、上記の著作が些かでも役立ったとすれば、それは著者と著者を知る者の喜びである。

一般に伝記の執筆には、対象者への深い共感と周到な事実調査が必要となる。プロテスタント・キリスト教の神学者として活動や研究を進める中で、竹中は1970年代以降、歴史史料による実証的研究手法を用いて、日本の状況の中でキリスト者として神と他者の為に特別な働きをなした人物を一人一人深く研究し、伝記的書物に纏める仕事に力を注いだ。社会的伝記(social biography)と自身が呼んでいた分野である。特に地方や社会の周辺で働き、ややもすれば忘れられがちな偉大なキリスト者の生き様を、神学的理解をもって深く考察し、その働きの意義を認め、それを実証的に記録し伝えることに自らの仕事の意味を見出していた。

1995年から学院の理事を務めていたが、2000年の学院創立125周年には、当時の学院長城崎 進先生から記念講演を依頼された。その時に選んだテーマが第5代院長デフォレスト先生のお働きであった。21世紀の幕開け、日本の大学は大きな変革期に差し掛かっていた。神戸女学院もまた、その伝統を活かしつつ、この時代の女子高等教育機関としての道を探りつつ歩まなければならない。

その中で、大事な事は何なのか、学院の伝統とは何かをデフォレスト先生のお働きを通じて共に学びたいと考えたという。

竹中のデフォレスト研究はここに始まる。まずは講演のための研究である。手近な資料や文献調査、直接デフォレスト先生に触れた人々の聞き取り調査をし、更に2000年9月にはコーベカレッジ・コーポレーションやハーヴァード大学ホートンライブラリー他で、特に1935年～1940年のデフォレスト資料を調査した。

デフォレスト先生は母を通して得た自らの信仰の源とも言える方である^{*}。竹中の研究熱は講演後一層高まった。既存の研究や記録はそれぞれに優れたものであったが、その扱いの範囲は限定的、断片的であった。デフォレストが疲労で病に倒れ1940年に帰米静養した後から戦時を経て、1947年6月に再び帰院するまでの消息は曖昧であった。この間マンザナでの働きがあったことは知られていたが、その詳細は不明であり、この空白部分の文献的確認がどこで得られるのかも分からなかった。そこで、2001年9月から10月にかけて、北米各地で講演の仕事をしながら、大規模な調査研究を行なうことにした。

2001年9月10日、カリフォルニアでの講演を終えた翌9月11日はスタンフォード大学フーバー研究所での調査を予定していた。丁度その朝、アメリカ合衆国全土を震撼させた歴史的大事件が勃発した。「9.11」事件である。さすがにその日一日は全米の活動が停止し、大学も閉鎖となったが、翌日からは厚意を得て、資料を見ることができた。1箱に15のデフォレスト資料と写真が保管されており、その複写を許された。

さて、その後はどうするか。米国全土に厳戒態勢が敷かれ移動がままならない状況下で、一度は帰国を考えたが、折角の機会、敢えて旅の続行を決意した。言わば決死の調査行であった。しかし、行く先々で実に多くの友人、知人、史料管理者のご厚意に預かり、結果的に期待以上の成果を得たのである。

竹中がこのとき携行したA6版緑表紙のメモ帳には、スタンフォード大学でのメモに続いて、コーベカレッジ・コーポレーション、ハーヴァード大学ホートンライブラリーでの調査メモがぎっしり記されている。いずれも前年に続く

2度目の調査だが、特にホートンライブラリー所蔵の「アメリカンボード宣教師文書」の「日本伝道史料」各巻にはデフォレストや学院関連文書が数多く含まれ、探索は集中と時間を要した。写真撮影も複写も不可とあって、鉛筆での筆写が時間の許す限り続いた。

このハーヴァード大学での調査日程の僅かな合間を縫って、母校イエール大学の創立300年祭に出席した竹中は、ボストンへの帰途、デフォレスト先生の母校スミス・カレッジの史料室に「淡い期待を持って」立寄る。10月3～4日のことである。そこに保管されていた3箱のデフォレスト文献を見て驚いた。それはデフォレストが戦時中に書き送り、また受取った報告書、資料類、受送信書筒のファイルであった。とりわけこれまで知られていなかったマンザナの日本人収容所でのケースワークの報告書や書類が含まれていた。マンザナでのデフォレストの働きに関する101頁に及ぶ文献。早速全てをコピーしていただいた。

この文献との出会いこそが懸案の空白部分を補うものとして竹中のデフォレスト伝執筆を可能にしたのだろう。旅の終盤に手にしたこの資料の束を通覧して、「この文献に充分目を通す前に成果について云々するのは早過ぎるが、私の印象が鮮烈な内に、感得した主な点を記しておきたい。」と、この資料に含まれる注目点7項目を英文でメモにしている。

旅の最後に立寄ったデフォレスト先生終焉の地、カリフォルニア州クレアモントのピルグリムプレイスでは、デフォレスト先生が書かれた *Patsy and I* と題する30編からなる小品集を見せていただいた。デフォレスト先生らしいユーモアに溢れる作品で、当時の中高部長春名康範先生の漫画として本に収まった。

帰国した竹中は「これで本が書けるよ。」と喜んだ。その後を研究と執筆、書籍編集に費やし、2003年4月に冒頭の著作は創元社から出版された。

* 母竹中(秋元)トシは三浦 環に声楽を学び、東京音楽学校卒業後、神戸女学院の声楽教師を1914年から1918年まで務め、キリスト者となった。

(故竹中正夫元理事夫人)